

泌尿器科紀要

第 8 卷 第 4 号

昭和 37 年 4 月

随 想

別 府 開 業 漫 筆

別 府 市 中 村 亀 市

稲田教授から何か肩のこらない随筆風なものをとの御注文で思い浮べるままペンを執つたが、一開業医の身辺雑記にすぎない。私は大正 8 年熊本を出ると間もなく九大皮膚科泌尿器科教室に入局した。当時泌尿器科講座はまだ独立して居らず、故旭教授が主任をなされ、故高木教授が助教授として泌尿器科を分担して居られた。泌尿器科が独立講座となつたのは大正 13 年 8 月で開講 38 年となる。月日の立つのは誠に早いものである。

旭教授は非常に厳格な方であつたが、ただ固いばかりの方でなく極めて御親切な方で、手を取る様に門下の指導をなされた。又酒が大変お好きであつたが、或夕方教授室から私にお呼びがあつて何事かとおぞおぞ参上すると、いきなり、君一杯やり給えと大きなコップになみなみと酒をついで差し出された。根が好きな私はそれをグツト呑み頂戴し乍らいい気になつて御相手申上げたなつかしい思い出もある。高木教授は非常に磊落な方で身なりなどかまわず、下駄も平気で左右違ひにはいて居られる事がたびたびあつた。又書画骨董は非常にお好きで、斯道に造詣深い御方である事は周知の事である。冬の夜寒むに骨董屋へ御供を命ぜられ、重い書画殊に版画を一ぱいかかえて帰つた事も幾度かあつた。御蔭で私もこの方面に興味を持つ様になり、昔の画家の名前など覚える事が出来た。晩年には自分で御書きになる様になり、今も多くの名品が門下生の間に秘蔵されている。臨床講義の時間に書画殊に江戸絵の御話は何時間も割愛され、学生は喜んで拝聴申上げた。

昭和 3 年、九大を辞し別府に開業今日に至るが、開業当時と今日を比べると全く隔世の感がある。ペニシリン始め種々の抗生物質の出現普及、麻酔の発達などで手術は容易となり予後も大変向上した。私が開業する時、高木教授は、中村君、腎臓迄はやつてよいが前立腺には手をつけるなよといわれた。それは当時の前立腺の死亡率は非常に高かつたからである。開業当時は行わなかつたが、戦後は必要にせまられてやらざるを得なくなつて始めたが、今では月に 3、4 回は肥大症の摘出術がある様になり、予後も悪くない。これなど泌尿器科学の進歩発達の賜であると思う

別府は土地柄色々と変つた症例に遭遇する。たとえば新婚旅行の第一歩を別府で記念せんとしてうまく行かず、晴れ着に厚化粧、香水の薫も馥郁と新妻が御来院を賜る事が少くない。ヒューメンが開かないもの、強靱なもの或は瘢痕収縮したものなど色々で、ブージー一かけでは拡張出来ず、電気メスで切開の止むなき事もある。時には逆に新郎が今まで出来たのが初夜になつて突然調子が悪いと早朝ホテルのゆかたがけのまま走りこむのが居る。性器には器質的に異常なく初夜恐怖症とでも云う可き精神的インポテンスで精神訓話が効果を呈する。次ぎに別府の名物は心中で、頻度では全国的に 1、2 位を占める。心中の原因は歌舞伎などでは義理人情に迫られてのものが多いが、別府のものは少し違う。一寸したはずみでやつて

しまつたという様なドライ型のものが殆んどである。死ねばそれ迄だが、助かつた場合、きまつた様に双方から親類か友人が迎えに来て男と女は西と東に連れ去られるが、死線を越えた2人は側の人の云うなりに簡単に別れて行く。其後になつて是非結婚したいと頑張り、許されない時は再度心中をはかる程の意志強固のものは居ない様で、昨日は昨日、今日は今日の雨がふるといつた風である。自殺に用いる薬は大低睡眠薬プロパリン系統が最も多い。一日で目がさめるものもあるが、数日も眠りつづける場合もある。呼吸が全く止つて心音がかすかに時々聞える程度のものに送管麻醉器で人工呼吸を行い救助し得た例もある。一般にありふれた自殺理由である。官公庁・会社の金の使い込み、病弱、事業失敗、家庭の不和等は別府では割合少ない。別府の海では冬でも春の様な暖かい陽を受けて何万というカモメが戯れている。禁猟区という事を鳥はよく知つたものだと思う。国立公園の野猿は始め¹三、四百匹であつたのが、遊覧客から餌を貰う様になつてから最近では千匹近くに殖えたとの事である。レジャーブームというか別府を訪れる観光客は年々増して近年は六百万人以上との事、又外人の御客も多くなつた。学会に招聘された外人教授も帰国の途路、別府を訪れる者が多く、その際日本の開業医の模様を見たいと私の病院を尋ねてくれる人もある。豪華なホテルの増築、ゴルフ、ロープウェイ、ヨット、スケート場、各種スポーツ場の増設其他至れり尽せりの遊覧施設を見て、まるで戦勝国の様だと評する外人もいるが、考えて見ると戦後日本人は少し贅沢になつた様な気もする。齡既に還歴を過ぎて数年、そろそろ引退してはどうかと友人からすすめられるが、メスを持つ身は恰も画家が筆を持つと同じで、治療によつて苦痛をのがれ起死回生快癒し感謝の言葉を受ける時の心境は画家が画を書き上げ得た時の喜びに数倍するものがある。患者は命を賭しての頼みであるだけにメス取る術者も真剣で心の緊張之れに越したものはあるまい。精神の緊張が長命術の第1条件である事はよく精神科医の言う所である。隠居して気が楽になつて急に体が弱つたという話をよく聞く事である。だから私も働けるだけ働いて健康を保持し度い考えである。

別府にロータリークラブが発足してから今年で丁度10年になる。現在会員50人で其の中の10人が満10年間皆勤無欠席者である。私も其の1人である。10年はおろか20年も健康で皆勤し度いと念願している。それには心の緊張が第一ではなからうか。

開業していても興味ある症例は相当出合うが雑務に追われて論文とまとめるまでに至らないで症例報告で御茶をにごす程度である。然し学会には出来るだけ多く出席して時代の趨勢に後れない様につとめている。願くば大学の先生方も出来るだけ地方学会に御出向されて暇のない開業医の為に再教育的講演を度々聴かして戴く様熱望して筆を擱きます。